学内活動報告
順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究 6
P.53－58（2018）

平成 29 年度第 8 回 FD 研修会報告

Report of the 8th Faculty Development training in 2017

小　川　典　子*　内　野　恵　子*　高　橋　智　子*　浦　川　加代子*
OGAWA Noriko　UCHINO Keiko　TAKAHASHI Tomoko　URAKAWA Kayoko

要　旨

本学部は、平成 25 年度（完成年度）以降、アクティブ・ラーニングを巡るワークショップを開催し、学生が主体的に学ぶための工夫、教育力の向上を図るための企画・運営をしている。今年度は本場アメリカで研鑽を積んだ順天堂大学医学部医学教育研究室准教授の建部一夫先生をお招きして「アクティブラーニング team-based learning (TBL) 実践例」のワークショップを開催した。本学教職員･学生はもちろん、他学部および他施設からの参加が例年以上に多くあった。午後のグループワークでは意見交換を通じて相互に研鑽・交流し、魅力溢れる授業への展望を探る記念すべき研修会となった。

索 引 用 語：ファカルティディベロップメント（FD）、FD 研修会、チーム基盤型学習
Key words：Faculty Development(FD), FD training, team-based learning (TBL)

Ⅰ．はじめに

今回の FD 研修会は真夏の暑い最中にもかかわらず本学教職員および学生はもちろん例年以上の他学部からの参加があった。順天堂大学医学部医学教育研究室准教授である建部一夫先生をお呼びして「アクティブラーニング team-based learning (TBL) 実践例」という興味深い内容のご講演に日頃の授業を振り返るよい機会となった。午後のグループワークでは意見交換を通じて相互に研鑽・交流し、魅力溢れる授業への展望を探る記念すべき研修会となった。

＊　順天堂大学保健看護学部
＊　*Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*
（Nov. 10, 2017　原稿受付）（Jan. 19, 2018　原稿受領）

Ⅱ．実施内容

テーマ：「アクティブラーニング team-based learning (TBL) 実践例」

目　的：

①アクティブラーニングの実践例についての講演およびディスカッションを通して今後の看護教育活動に活用し、教育改善および教育力向上を図る

②学生および本学他の教職員間の意見交換を通じて、多面的な視点から学生が主体的に学ぶための工夫や教育力向上を図ると共に、相互に研鑽・交流する

実施日：2017 年 8 月 2 日（水）10：00 ～ 16：20

参加者：本学部教職員 35 名、職員 7 名、本学部学生 12 名、医学部教員 1 名、スポーツ健康科学

部教員 2 名、順天堂医院職員 6 名、順天堂大学静岡病院職員 6 名　合計 69 名

研修スケジュール：

10：00 ～ 10：15　開会のあいさつ、学外参加者の自己紹介、講師紹介

10：15 ～ 12：00　アクティブラーニング実践例について
「team-based learning（TBL）実践例」
建部　一夫先生（順天堂大学医学部　医学教育研究室准教授）

12：00 ～ 13：00　昼食　移動・休憩

13：00 ～ 14：45　グループで意見交換（7 グループ）
テーマ：今後の授業へのｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞ活用の可能性について
100 分授業で授業はどう変わったか？
時間毎の授業評価で授業はどう変わったか？

14：45 ～ 15：00　移動・休憩・発表準備

15：00 ～ 16：00　各グループ発表　1 グループ 8 分間（発表 6 分・質疑応答 2 分）
講評（大熊　泰之　学部長）

16：00 ～ 16：20　コーヒーブレイク アンケート回収
解散

Ⅲ．実施結果

アクティブラーニングのなかでも team-based learning (TBL) についての実践例について教育工学的な立場から、またアメリカでの長期留学体験よりの本場の TBL について興味深い実践的な内容であった。重要ポイントとしては事前学習を生かすこと。また課題作成は逆向設計で行う。学生に何ができるようになってほしいか・・という観点からコースをデザインする。一方的な講義ではなく、予習を基本として学生同士が教えあうことを設計し学習者中心の教育を行う。キレイごとでない現実に即した講義であったため、グループワークにも学生の本音が聞こえてきた。

Ⅵ．アクティブラーニング活用の可能性について

①　100 分授業でどう変えていくか？

A グループ：

学生：授業構成によって休憩は無くても良い、休憩より早く終わって欲しい

・90 分から 100 分への 10 分の延長はさほど気にならない、集中力としては変わらない、教員によっては早く終了している
・昼休み・休み時間が減ったこと、授業のタイムスケジュールの変更にまだ慣れない
・メリットはあまり感じないが、土曜日の補講・試験は減ったと感じる
・学生同士での話し合い、発表、考える時間がある授業（Active Learning）は増えた。教員の講義を聴くだけでなく、クラスメイトの意見を聴けることでの学びは大きい

教職員・指導者：前半＋休憩＋後半を意図した構成は講義の内容により難しい（演習系・講義系科目での違い）５分の休憩は取らねばならないのか、時間が足りない

・休憩後の後半の授業開始に落ち着くまでに時間がかかることがある
・1 限目の開始は 8：50 となったが、学生が集まらず結局 9：00 開始となっている
・15 回分の講義を 14 回に再構成するのが困難であった
・学生が予習をしてくることで、TBL を取り入れやすくなりそう（予習がないと学生間の知識の差がありすぎて TBL は困難）。いくつかの講義コマで TBL を取り入れてみたい

B グループ：

学生：重要な課題を分担し、自分たちで分担した部分

を教え合う。事前学習を行って教え合うことで印象に残るため、他の講義でも活かせる。100 分という時間の長さではなくどう組み立てていくかが問題。事前準備は大変だけど知識の確認をしてから講義が行えるため前よりいい。

・休み時間が５分なのでトイレにすら行けない。移動時間がない。授業時間数が多すぎるため課題も多い。（統合できるものは統合すべき）ゆとりがないと新しいことも進められない。

教職員・指導者：良かれと思って教員が話しても学生はそうは思っていないことには驚いたが、授業は教員と学生が共に学びあうものだと感じた。

・アクティブラーニングでは、事前の課題が多くて授業中に他の科目の課題をやっている。学内の中で科目の内容を出し合って、課題を出す科目を決めていくことが大事。課題の提示の仕方も大事、実習のカンファレンスではディスカッションしているので授業にも取り入れていけば良いかもしれない。

・講演内容は、今までのアクティブラーニングもどきにも活用できる。カリキュラムの中で位置づけるにはどうしたらよいか？科目の連携が不十分な感じがする。人に教えるには自分がよく理解していないとできない。お互いに教えあう部分が重要である。現在やっているグループワークにも取り入れてみたら？例えば、学んでほしい点を提示して、意見交換して、今わからないところは調べてきて教えあう。講義の中で、部分的に教えあう部分を取り入れたら？

・学生同士が教えあうと学生が多様性を知る、そんな意見もあるのかと知って共有できる。

Ｃグループ：

学生：先生の形態はあまり変わっていない。実感として 90 分も 100 分も変わりない、100 分でやらなければならない授業はグループワーク位と感じる。また、毎回、その日の予定を言ってくれた方が良い。

・100 分は緊張感がある授業が良い。教員はマイクを持って歩き回って発言を促すと刺激になり、良い。

教職員・指導者：本来 100 分の中で前半講義、後半ディスカッションなどメリハリつけて工夫して実施することが目的。

・〇か×で収まりきれないのが看護なのでグループワーク TBL は難しい。いろいろなことを組み合わせてやることが大切ではないか。概論段階では、答えがなく、バズセッションで意見させる、内容に応じたメリハリと到達度が大切。難しいが 15 コマ中１コマか７コマ中１コマ程度やってみようと思う。

Ｄグループ：

学生：１年生からグループワークは行われているが、３，４年生になると多くの授業で行われるようになる。グループメンバーの中にはしっかりやりたい人とその時間で終わりたい人がおり、参加具合に温度差がある。しかし、学年が上がるにつれてグループワークでの学びは深められるようになってきている。

・固定されたメンバーでのグループワークは役割ができてしまうので、多くの人の意見を聞くためにも、メンバーは変化があるといい。

教職員・指導者：１年生では知識、２年生では疑問を深める、３年生では問題解決能力を養う、など各学年によってアクティブラーニングのやり方を変えている。

・TBL は学生の予習を前提に展開されるが、学生はほとんど予習をやってこない。また、ピア評価など、個人を点数化することが苦手であり、アメリカの教育方法を日本に持ち込んでも成功するとは限らないのではないか。しかし、グループ評価にしたところ多角的な視点で評価ができていた。

Ｅグループ：

学生：グループで分かれると同じことを学んでいるのか不安になるらしい

・授業の中で考えていないと、そこで意見を言えなくなるのでしっかり聞いている

教職員・指導者：切り捨てられた 10 分で必要な技術を学ぶ時間を削らざるを得なかった。時間のロスである。授業では考えてほしいところでグループワークを入れるようにしている。素材を与えて、自分の意見を書く、発表する時間を設けている。しかし、授業のなかでは、教え合うところまではいかない。技術演習では、無理がある。

・学生が互いに教え合うことが重要。グループワークもディスカッションの場だけでなく、教え合う場となると知識の定着度が上がる。

・総合実習は、学生自身が領域やテーマの方向性を決めるところから主体的に選択するかたちになっている。ただし、実習中がアクティブかというとそうでもない。目的をこなすことに対してはアクティブだが、学生間で学びを共有し高めあうという部分は少ない。総合実習の段階でも、主体的に看護計画を立てて看護展開を主体的に行うことは難しい→形式はアクティブだが、実習内容がそうなっているかは、学生の個人差がある。かなり、指導者が導く

・必要がある授業では考えてほしいところでグループワークを入れるようにしている。

・逆転授業は予習してきた学生には効果があるが、それ以外の学生にはおもしろくない授業になってしまう

・冒険的なことが授業のなかでできなくなった

F グループ：

学生：90 分も 100 分も変わらない。休憩時間をどこで取るかはあまり関係ない。合間の休憩は重要視していない。

・３年生としては全体が早く終わってほしいと思っている。所定の時間に終わらないと支障がある。

・先生に気を使わないで発言することができる。グループ人数が多いと発言する学生が偏る。

教職員・指導者：コマ数の調整はあったものの、学生、教員共に授業内容の大きな変化はない。

・集中できないときは講義が何分であろうと寝てしまう学生はいる。

・学生は答えばかりを求めているように感じる。教科書以外の情報が求められる人も少数いる。学年によって受ける空気感も違うのでは。教員は知識提供の講義のほうが楽。TBL のような形式を取り入れても教員の手が多く必要になる。

・答えを求める授業になっている現状がある

・学生はどこが試験に出るのかについて知りたい。教員はそのような学生に合わせた授業にしていかなければと思う。

・教員は一方向的な知識の提供ではなく、学生には学ぶ姿勢が重要である。

・今後の課題として、大学としての年次計画等への組み方も検討していく必要がある。

・学習の段階を考慮し、一度既習内容をおさえ、積み重ねていくように学習を組み立てる。

・学生にも責任がもてるように、主体的に体験的に目的をもって学べるように支援する。

G グループ：

学生：授業時間の配分が教員で違い、それに戸惑いを感じる一方で、特に変化はないとの意見もあった。

・途中で休憩をとる教員と、とらないで早く終わる教員がいるので戸惑う。教員によって対応の違いが生じている

・授業の途中で 5 分間休憩してきちんと 100 分で授業を終える教員は人気が高い。

・100 分になったが、これまでとあまり違いは感じない。

教職員・指導者：授業時間が長くなったことにより、授業の中にアクティブラーニングを取り入れる機会が増えたと感じるとともに、効果的な方法を模索していた。

・どこで休憩をいれればよいか、区切るタイミングを考えて授業を組み立てている。

・絶対に授業は延長しないように心掛けて時間配分を

している。

・教員同士の情報交換において、途中で休憩時間を確保せずその分早めに終わったほうが学生の反応が良いと聞いた。しかし、そのようにしたら、学生からは途中で休憩時間を取ってほしいと要望が出た。

・授業の途中で休憩時間を必ず 5 分間入れなければならない風潮には疑問を感じる。

・100 分授業にして学生の理解度に変化は出たか？

・教職員･指導者としては、授業の中でディスカッションなどのアクティブラーニングの時間が増えたので、学生にとっては有益だと考えていた。

・ディスカッションがあると、寝ている学生を起こすことができるので、その学生も授業に参加できる。

・ディスカッションしなくてはいけないので、本当は意欲的でない学生も積極的にならざるを得ない（授業を聞いていないと、回答を指名された時、答えられないので困ってしまうため）。

・静かに聞いているだけの方が楽な時もある。しかし、ディスカッションなどがあると知識の定着がはかれるし、総合的な力が身に付くと感じる。

② 時間ごとの授業評価で授業はどう変わったか？

A グループ：

学生：毎時間は面倒なので、「３：普通」になりがち。講義に変化がないと 3 を付ける。普通の基準が分からない。講義が早く終わると、高評価になる傾向はある。意見はリアクションペーパーに書いている（無記名と記名で記載内容を変える）教員が授業評価を見ていることを知らない学生もいるのではないか。授業評価の意味（教員にとって、学生にとって　を再度周知したほうがよいのではないか。教員からのフィードバックがあると嬉しい。授業評価は、教員と学生との「共同作業」であるため、双方が有効に活用できることが必要。

教職員・指導者：「３：普通」とされ、評価が思いのほか低くモチベーションが下がった。自由記載は少ないが書いてあることは参考になる。昨年までの期末のみの評価よりも、次の授業へのフィードバックが可能になった。

B グループ：

学生：リアクションペーパーと FD の両方は大変。FD は匿名だから意見しやすい。マンネリ化している。授業評価のマークシートが回収できていないため欠席者の悪用がある。効果的な活用になっていない。学生の本音が出にくい。

教職員･指導者：毎回授業評価をする必要があるのか？毎回評価を行ってもすぐには改善しない。学生にとっても教員にとっても毎回は負担になっている。FD 評価のために 5 ～ 10 分取られてしまう。

C グループ：

学生：学生としては時間毎の評価は 3 で平均化している。毎回だと面倒な面があるが、学期に 1 回だと 1 コマなどの先生を忘れているので毎回が良い。自分の意見を言う機会としてグループワークは役立つが、学生同士なので、言いやすい。立場が異なる人には言いにくい。グループワークは自分の意見を持つ練習にはなる。距離が近くなれば言える。フレンドリーな指導者さんだと気軽に相談できる。言いやすい。悩みが解消される。これを言ったら怒られると思って言えない人もいる。

教職員・指導者：教員も評価を見てめげるときもある。教員を上手に利用してほしい。意見を持つ、意見を表明する場としてグループワークやそれに準じた場が必要。意識的にゴールを明確に伝えていきながら意見を言ってもらう。

E グループ：

学生：毎時間は手間だし、惰性で「３」をつける学生も多い。

教職員・指導者：授業評価で学生にこびを売るような展開になってしまう可能性がある。授業のなかでわからなければ評価が低くなり、プレッシャーを感じる。

本当に教えたいことを伝えられない。一話完結であることを求められる。経験として知っていることを理論とすり合わせられると評価が高くなるが、内容によって難しい。

Gグループ

学生：学生からは、授業評価については概ね好意的な意見が多かった。

・当初は、評価というのは批判的なことを書けないと思っていた。しかし、ある教員から良いことも書いてよいと助言されたことをきっかけに授業評価を書き易くなった。また、教員からのレスポンスがくると、きちんと自分の意見を見てくれているんだと思えて嬉しかった。

・教員が授業の展開を工夫している点に気づいた。このようなことを細かく考えるようになった。これまでと異なる視点で授業を楽しめるようになった。

・リアクションペーパーがある教員には、ポジティブな内容はこれに書き、ネガティブな内容は（無記名の）評価用紙に書いて使い分けることができるようになった。

・１年間の総括で評価を求められても、教員の名前さえ記憶にない時もあるので現在の方が良い。

教職員・指導者：教職員・指導者からは、好意的な意見もある一方で、批判的な意見も見られた。

・授業評価をすることで、学生が評価者として育てられてきたのでは？と感じる。

・当初に比べ、評価が優しくなってきた。評価は欠点だけを指摘することではないということが理解されてきたのかもしれない。

・授業評価をすることに意味はないと思ってしまう。学生が５段階評価の３しかつけないような形骸化した評価の現状を改善する必要性がある。

・平均が３だとモチベーションがさがる。頑張って授業を改善していこうという意欲が削がれる。

・授業評価を導入時に３を基準につけると伝えたことが問題だったのではないか。これによって、学生が３を固定的につけるような風潮が生まれてしまったかもしれない。

・授業開始直後に、早々に評価をつける学生を見つけると気持ちが凹む。

・授業評価をすることで学生は授業が改善されたという実感はあるのかの疑問。

Ⅴ．おわりに

グループワークでは、各グループとも学生を交えた意見交換で、授業に対する学生の本音を聞き、愕然としながらも授業に対するさらなる熱意を燃やした白熱した意見交換となっていた。授業評価は、教員と学生との「共同作業」であるため、双方が有効に活用できることが必要であると再確認するよい機会となった。アクティブラーニングではクループでディスカッションするだけでなく、学生同士が教えあうことを取り入れると知識が残って効果的であるとわかった。授業時間 100 分は統一されていないが独自のやり方があっても良い。今回の講演を通じて、学生・教員ともに授業を見直すことができ、相互に研鑽・交流し、魅力溢れる授業への展望を探る記念すべき研修会となった。